

平成18年3月7日

於：国土交通省（2号館）11階 土地・水資源局會議室

国土審議會土地政策分科会企画部会  
第4回低・未利用地対策検討小委員会  
議事録

国土交通省 土地・水資源局

## 目 次

○ 開会 .....	1
○ 議事	
NPO法人による取組について	
① KAOの会（千葉県鎌ヶ谷市） .....	2
② 花咲き村（東京都日の出町） .....	10
③ 自然回復を試みる会ビオトープ <sup>もうこ</sup> 孟子（和歌山県海南市） .....	20
④ えがおつなげて（山梨県北杜市） .....	31
○ 閉会 .....	42

## 開 会

○中村土地利用調整課長 時間前ではございますけれども、委員の皆様、本日、御出席予定の方、全員おそろいでございます。

それから、本日、遠路、この小委員会に御参加いただきましたNPOの関係の皆様も、えがおつなげての代表理事の方、少し遅れるということでございますので、これから始めさせていただきますと思います。

それでは、お手元に配付の資料の確認を最初にさせていただきますと思います。

議事次第、座席表、委員名簿、本日発表いただきますNPO法人の一覧表の1枚紙、それから資料が1から6までと、参考資料となっております。

もし何か足りないということがございましたら、事務局の方にお申しつけいただければと思います。

それから、ビオトープ孟子さんに持参いただいた資料が3種類あるかと思うのですが、それも後ほど御参照いただきたいと思います。

それでは、委員長、よろしくお願いいたします。

○柳沢委員長 おはようございます。

今年最初の小委員会ということでございますが、今日のメインテーマは、NPO法人による取組ということで、4つのNPO法人の皆様から、低・未利用地対策に資すると考えられる取組の内容を御説明いただくということになっております。

皆様には遠いところ、ありがとうございます。

今日の進め方ですけど、各NPOの皆さんにだいたい15分ぐらい御説明をいただいて、その後、それぞれ10分ずつぐらい質疑ということにさせていただきますと思います。そして最後に、まとめて全体の質疑として10分ぐらい時間をとりたいと考えます。今日の議題の(1)はそういう時間配分でまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

## 議 事

NPO法人による取組について

① KAOの会（千葉県鎌ヶ谷市）

○柳沢委員長 それでは、最初に、「KAOの会」の下田理事・事務局長、お願い致します。

○下田理事・事務局長 おはようございます。

「KAOの会」下田と申します。

昨年来、国土交通省さんには、阿部局長さんの所管で、たまたま私どもが5年間やってきた成果が認められて、国土交通大臣賞である土地活用モデル大賞という栄えある賞をいただけたという昨年の出来事がございました。私どもがやってきたことが皆様方の何かのお役に立てればという思いで、今年1年間は過ごしていこうと心に決めた矢先のこの呼ばれでございますので、お話としてできる限りのことをさせていただきたいと思っております。

まずKAOの会というネーミングでございますけれども、KAOの会と書きます。これは Kamagaya Amenity Organization の頭文字をとりましてKAO、合わせて街の顔、駅前顔をつくっていききたいという思いを込めましてつけた名前でございます。私どもの会には、後ほどお話に出てまいりますけれども、駅前に面する共同ビル化等を手がけております。その駅前に面する共同ビルのオーナーさん全員、あるいは周りの地権者の皆さん、その共同化ビル、又駅前をつくりあげるにあたって協力して下さった企業、コンサル会社の皆さん、それが主たる会員として成り立っております。

鎌ヶ谷市といいますのは、都心から25km圏にあります人口10万3,000人強の人口をしょった小さな市でございます。その中で千葉県で、JRの船橋という駅は御存じかと思うのですがけれども、それから支線で4駅、10分のところにあります東武野田線の鎌ヶ谷という乗降客数約2万3,000といわれておりますけれども、そのような小さな駅、その駅前のまちづくり活動でございます。

鉄道の連続立体交差事業を契機としまして、市施行の区画整理事業がとり行われまして、その区画整理事業の駅前広場の線型ができるかできないかという時点、仮換地の時点で、駅前広場に面する地権者の皆さんに行政から声かけがありまして、そこでみんなで勉強会が始まったというのがスタートラインでございます。

そういう中で、よい街をつくろうという言葉にどなたも反対する人は当然いらっしゃらないわけで、それから、よい街とは何だろうということで議論を重ねていったわけでございます。

その議論する上での行政と民間の地権者の皆さん、あるいはコンサルの皆さん、みんな

で垣根を取り払って議論ができたというのが今から考えますと非常にいい結果になってきたのではないかと考えております。お互いにできることを議論していったということでございます。

そういう議論の中で、いろいろございますけれども、よい街の意味合い、1つの具体的な例としては、景観をそろえたり、あるいは市民の庭のイメージでまとめていきたい、あるいはお花が…、そういういろいろなキーワードが出てまいりまして、1つの形としましては、一元管理体制という言葉が出てまいりました。

街をつくっていくうえでの行政としてやるべきこと、駅前管理、あるいは民間共同ビル化、そのビルの管理、それを一体的に管理できたらどんなに素晴らしいことかという方向にみんなの意見が出てまいりまして、行政側としましては、みんなの意見をまとめたものを1つの書類にしまして、それが整備指針という表現になって、最終的に駅前のある部分、バイブル的なものにまで進んできたということでございます。

その景観そろえ、これはたまたま民間の共同ビル化というのも一緒に議論になって、同時進行の形になりましたので、どうせつくるならば、そういう景観に配慮した建物、あるいは駅前広場にしていきたいということで、1つの方向性が出てまいりました。

当然景観をそろえる、それと同時にテナントミックス、望ましいテナントのあり方、駅前でございますので、商業空間をしょったという方向に意見はまとまってまいりましたので、そのテナントミックスも含めて、それも議論してまいりました。

その中で特に一元管理体制をやっていくためには組織が必要だねということになりましたので、当初は駅前空間プロデュース株式会社というようなことをイメージして皆さんとともに議論していたのですが、最終的に建物竣工が近づいて、実際組織を立ち上げようという時期になりまして、改めて検討に入ったときに、その求める組織というのは利益を追求する組織ではないなということになりまして、そこで出会ったのがNPOだったわけでございます。

まさに我々が目指す組織にこれはぴったりだということで、NPO法人格をとることで進めて現在に至ったわけでございます。

当然その組織の立ち上げにつきましては、継続性というものが話題になりました。継続性って何だ。一番一般的には嫌われるお金という問題、これは避けて通れない要素であるということで、組織を立ち上げるからには、安定的な経営ができる——イコール補助金、

寄附金、会費等に頼って運営していくようでは継続的な運営ができないということで、NPO法で認められているその他の事業ということで、自分たちでお金を確保しながら運営していこうということで、結果といたしまして、共同ビルの資産をお預りして、その管理費をいただいている。あるいはこの駅広の隣接の駐車場の管理運営を私どもにお任せいただいているということで、当時、試算で、小さな組織でございますので、400~500万の最低運転資金が要るということで、その安定的な収入の見込みの中でこの会を設立していったわけでございます。

あとは整備後のソフトの実質的な運営という段階になりまして、行政との契約をしていく部分がございます。これも私どもがあくまで駅前広場の維持管理への参加という定款の中で表現してございます。これは行政から受託すると書いたら多分そっぽを向かれたと思います。そういう意味で、新たな表現として単純に参加という言葉、もし受託できなくても、自主的に駅前広場を清掃したり、花の手入れをしたりすることは参加でございますので、参加という表現にした結果としまして、設立は平成12年の11月でございますけれども、翌年の13年の4月から業務委託という形で、私どもに駅前の清掃、あるいは草花の手入れ、初年度は放置自転車の管理、この3点セットで私どもは受託して、駅前の管理業務を行っております。

合わせてビルの方も、地権者の皆さんからお預りをして管理でき、まさに一元管理体制ができたということでございます。

その契約に関しまして、これは縦割り行政の悪さ加減と言わせていただきますけれども、駅前を管理するために必要なことを本当は1本で仕事をいただけたらこんな楽なことはないと思うのですけれども、依然として、緑の管理は公園緑地課からの契約、歩道の清掃等は土木の管理課、放置自転車は市民安全課、その3つの部署とそれぞれ交渉をして、それぞれ契約をしなければいけない。請求書もそれぞれ、お金をいただくもろもろの書類も3本立て、これはわかった上での愚痴でございます。

契約の中でちょっとだけ工夫をしてもらったことがございます。一般的な契約という形をとりますと、何曜日と何曜日、何時間、何人、幾らでという契約になるのが一般的です。そこにちょっと工夫を担当の方と相談しまして、そういう制約事項の中の後ろに、括弧書きで、原則として、あるいは曜日を問わないという表現を入れてもらいました。それによりまして各課から与えられた時間の総数を年間で自由に割り振りして今現在、駅前に朝8

時から5時まで常時1人配置して、草花の手入れ、道路の清掃、これを行うことが可能になっております。ちなみに元旦も出ております。365日、誰か駅前において、ごみ拾いをやったり、あるいは晴れた日には水やりをしたり、花がら摘みをしたりというのを行っているということでございます。

ちなみにこのマンションの人たちからもKAOの会に景観維持費という形で参加していただいています。わずかな金でございますけれども、今現在58世帯プラス9テナント、ここで月3万円、年間36万円のお金をいただいています。ですから、行政からの受託金プラス年間36万円で今の駅前の維持管理業務がほぼとんとん、若干マイナス、そのくらいで推移しております。

そのような体制で、地域の皆さんにも参加いただく形で、街並みの維持管理体制を行っている。合わせて私どもの目指すまちづくり、これは駅前でにぎわい創出というものも考えていかなければいけないということで、この駅前広場をどういうふうにつくりあげるかという議論の中で、広場スペースを設けております。このお手元の資料の1ページ目のところがウッドデッキのスペースでございますけれども、イベント広場というふうに書いてございます。この部分で年間冬にはクリスマスイベント、ここに150人のお子様たちを集めてクリスマスの飾りつけをしたり、あるいは毎年恒例の12月23日には地元の小中学校、あるいは高校、地域の音楽家の皆さんが集まって、ここでクリスマスの音楽祭を行っております。

また、夏には、地域との連携による夏祭りを開催しております。

この夏祭りについてちょっと御説明させていただきたいのですが、今まで既存の商店街というのが1ページ目にあります野田線の反対側が既存商店街でございました。この東口というのは雑木林でございまして、何も無いような状態、民家が若干あるという状況でございましたけれども、その西口の商店街の夏祭りというのを地元商店街振興組合が毎年開催しておりました。と同時に、地元の自治会は自治会で小学校の校庭を使って盆踊り大会というのをやっておりました。縁がありまして、いろいろ皆さんと話す機会があったときに、それぞれの団体ではそれぞれの悩みを抱えていた、商店街は会員数がどんどん減ってシャッターがしまっていていっている。自治会は自治会で高齢化が進んでいる。そういうお互いの悩みの中で、私どもとしては、単純接着剂的役割でしかないのですが、みんなで議論して、目的は何だろうね、いろいろ地域の人たちが楽しんでくれればいい。

その共通の目的だけに向かって手を組むことは可能だったわけでございます。

商店街の人にいわせると、究極お祭りをして、自分たちは、人が出てもらって金が儲かればいいのだ。それを表に出したら自治会の人たちはだれも手伝うことができないのです。人がみんなが集ってくれて楽しんでくれる。そこだけに絞れば一緒になってできることがある。実際、それを行いましたところ、今年で4回目になりますけれども、去年、3回終わらせました。非常に人出が増えて、エリアも、この東口のロータリーも、昨年から地元警察も全面通行止めの許可を出してくださるようになった。安心してお祭りがまた一段とにぎわいを増すことが可能になった。

そのような地域との連携も私どもの小さな役目かもしれませんが、接着剤的役目も果たしている、地域のコミュニケーションもより一層とれるようになりつつあるというのが実態でございます。

そういう細かな話、まだまだたくさんございますけれども、今日の御説明の時間の中では難しいものですから、この資料をじっくり読んでいただくとだいたいおわかりいただけるかなと思います。

最後になりましたけれども、そのような地道な活動を行政ともども一緒になってやってきた結果として、お手元の資料の最後でございます——ここに路線価の表をつけてございます。これはなかなかこういう数字であられる珍しいケースかと私どもとらえて、ある部分自慢げに思っているところでございます。

平成11年、先ほどから申し上げました既存商店街、西口というところが鎌ヶ谷市では路線価の一番高いエリアでございました。それが平成11年、ちょうどお手元の最後につけました写真の上の時点、10年5月ごろの写真でございますので、道路線型ができあがって、グレードアップ工事も、あるいは民間の共同事業も何もしてない状態、この時点で西口、写真の左側の既存の商店街が平米23万円でございます。この駅前ロータリー部分が平米22万円という評価が出ておりました。これがこの経過を見ていただければわかるとおり、平成17年度で東口が22万が17万、西口の商店街が23万が12万5,000円という数値になっています。千葉県全体、あるいは全国下落が続く中で、非常に東口については善戦できた。結果的には地権者の皆さん、共同化ビル化するにあたって、私どもがいろいろお話しさせていただいた資産価値を高める結果になるのだよという部分を珍しく数字で証明できたのかなというふうに思っておるところでございます。

やはり手をかけていくということの重要性は、非常に私は鎌ヶ谷の場合ほうまくできていったのかなというふうに思っております。

最後になりますけれども、まちづくりというのは、どうしても2つと同じことではないと思っております。地域によっても違いますし、そこに住んでおられる方の思い、すべてによって違ってきますので、白紙のキャンバスに描くように作りあげていかなければいけないというのがいつも思うところでございます。

時間になりました。

○柳沢委員長 ありがとうございます。

それでは、自由に意見交換なんですけど、ちょっと私から最初に。この資料を事前にちょうだいして、一応ざっと目は通しているのですが、予備知識がない人間には少し今の御説明、背景がちょっとわからなかったものですから。このKAOの会のこの場所との関わり方なんですけど、区画整理事業をここはやったわけですね。その際に、区画整理事業で出てくる土地の具体的な土地利用について、テナントを誘致するとか、あるいは場合によってはデベロッパーを誘致するとか、そういう段階に関わられたのか。あるいはそれは区画整理事業自体でやられていて、それがだいたい見えてきたところで、そこでできあがってくる場所の作り方について、景観上の問題とか、あるいは使い勝手の立場からとかいうような観点から、作り方についていろいろ関わってこられたのか。あるいはできあがった後の管理段階、それは先ほどからいろいろ御説明がありましたが、管理段階でいろんな立場で地元の観点から関わって積極的に役割を果たしたのか。この3段階ありそうなんですけど、全部に関わったのですか。それともそのどれかですか。

○下田理事・事務局長 全部でございます。

ちょっと時間がないのではしよったくらいでございますけれども、まず今、お手元の写真の段階ではもう目いっぱい絡み終わったところでございます。

KAOの会というのは、NPO法人KAOの会と称してはいますが、前段がございまして、そこにもちょっと書いてございますけれども、その前段というのは、駅前空間検討会という地権者さんの集まりが母体でございます。

○柳沢委員長 そうすると区画整理組合と表裏のような形だったのですね。

○下田理事・事務局長 そうです。ですから、まだこの線型ができる前、雑木林の時点で、仮換地が終わったちょうどその時期に、行政の方から、駅前ロータリーに面する地権者の

皆さんに集まってください。勉強していきましょうよという投げかけがスタートラインでございます。

○柳沢委員長 わかりました。ありがとうございました。

ではそれを前提に自由に御発言いただきたいと思います。

○土屋委員 こういうことをやる時に、地域の方が主体的に取り組まれることは大事なわけですが、その中でデザイナーというのですか、ある程度デザインをしていく人が必要になってくると思うのです。この場合デザインとは、物的な設計をすることと、いろんな議論のコーディネーションをするという、2つが両方ともデザインとしてあると思うのですけれども、こうしたことは地域の方の中で主にだれが担われたのですか。本当に地域の一般の住民の方が担われたのか、それとも、資料で下田さんご自身は三井建設ご出身だということで、専門家でもある下田さんがかなり主体的に中心になって動かされたというふう

に理解してよろしいのでしょうか。

○下田理事・事務局長 今のお答え、手前味噌な話になってしまいますけれども、基本的には私が牽引者として、そのときのまさに三井建設という看板が邪魔する部分もございました。たまたま私は鎌ヶ谷に住んで、今現在もう30年になります。当時はまだ20数年でございましたけれども、やはり鎌ヶ谷の住民の立場というのを強調させてもらいまして、企業色を自分なりに消してその席に臨んでいたつもりでございます。それが結果として信頼関係の構築という部分につながりまして、いろんな私の言うことも素直に聞いていただける。ある部分、行政との間に立った位置づけという役割も担えたのかな。たまたまそういう業種におりましたので、行政の求めるものも多少理解しながら、民間の方の権利も主張しながら、そういう間に立ってまとめ役としては何とかできたのかなということでございます。

○柳沢委員長 ほかにいかがでしょうか。

冒頭の方の御説明で、事業資金を確保するために共同ビルを取得されたというふうに伺ったのですが。

○下田理事・事務局長 共同ビルの資産をお預りして維持管理運営を委託されているのです。地権者さんから契約させていただいて。

○柳沢委員長 管理受託ですか。

○下田理事・事務局長 そうです。その管理受託の契約も含めた形でやっておりますので、この駅前広場のテナントミックスもKAOの会でコントロールできる状態になっておりま

す。

ですから当時、議論の中では、どんなテナントに入ってほしいかというのも議論になりまして、これは行政も含めてみんなで議論して、結果的には出てほしくない業種なんていうのがよく話題になりまして、ここでいないと思いますけれども、サラ金とか、そういうのは嫌だ。いたらごめんなさいでございますけれども。

○柳沢委員長 それがコンサルタントの役割も果たした。

○下田理事・事務局長 そんなおおげさな話ではないのですけれども、やはり駅前をいかに良好な状態であるということを考えたときには、やはりテナントミックスというのは非常に大きなウエート、要素になってまいりますので、その望ましいテナントミックスを実施していくためにも、一元的にそういう組織でテナントのミックスが可能な状態にもっていけるというのが資産をお預りすること。そうすると相続が万が一発生したとしても、共同ビル化して共有化させておくことによって、そういうリスクは最小限にいい状態が保てるだろう。

○柳沢委員長 そうすると収入の基本的な構造は、共同ビルの運営受託費ですね、それと自治体からのいろいろな委託。

○下田理事・事務局長 自治体は、現在もらっているお金は赤字でございます。ですから、まず先ほど申し上げましたけれども、ビルの運営、その家賃収入の1割をみてくださっています、地権者の皆さんは。それと同時に、今現在、この一等地の共同化ビルが一番いい場所に、7坪程度でございますけれども、事務所を構えさせてもらっています。それは現地を見ながらということをやっています。それも地権者の皆さんからただで使わせてもらっています。それでもまだ会の運営資金には足りない判断しまして、その駅前ロータリーの隣接地をお持ちの方と協議させていただいて、たまたま東京にお住みで土地を持っておられる方もいらっしゃいまして、そこに足を運びまして、趣旨をお話して、駐車場の管理業務として駐車場の管理をさせていただいて、そこでいくばくかの差益、駐車場管理だけでも今現在150万ぐらいの収入にはならんとしている、その差益で。そんな状況でございます。その2つが大きな柱。それとプラス年間では駅前の通常管理業務、これの委託事業、あるいは冬のクリスマスイベントを行政ともども一緒にやっておりますので、そこでのクリスマスイベントの中の一部のお金を鎌ヶ谷市さんからいただいている、これも業務委託でございます。

ですから、補助金という項目では、補助金ではいけないという話はどこにもありませんけれども、結果として今現在、6年目に入っておりますけれども、立ち上げから含めて補助金は1銭も使ってない。一昨年は内閣府の都市再生モデル調査で600万のお金はいただいてきましたけれども、これは補助金ではございませんで、業務委託でございますので、国交省さん経由でお金を直接国からいただいたというのが16年度ございます。

○柳沢委員長 ほかに御質問ありませんか。

○小田切委員 当時、まちづくりプロデュース株式会社を発想されたということなのですが、まちづくり株式会社は決して少なくないのですが、今から振り返ってみて、株式会社形態だったときにはどんな問題がありましたでしょうか。

○下田理事・事務局長 株式会社のイメージというのは、やはり私自身、あるいは多分世間もそうだろうという勝手の思い込みかもしれませんけれども、株式会社と名前がついた時点で、株主に利益を還元していくことが目的になるはずなんです。やはり収益を求めない株式会社というのはあり得ない。そう考えますと、やはり私どもの選択肢が正解だったのではないかな。といいますのは、NPO法でいいところは、本来目的があって、その目的を達成するための収益事業は認められているわけですから、ただ、そこで私どもも余剰金を出したりしていますけれども、余剰金は次年度繰越で、また次にそこにストックがふえることによっていろんなことをやっていける。今現在、音楽祭を行うようになっております。クリスマスイベントにしましても、6回目を迎え、行政からは約100万のお金をその飾り付け費用として、業務委託費としていただいております。その他、足りない部分の飾りつけ等をKAOの会で約100万出して、200万くらいでクリスマス費用としております。プラス100万はKAOの会として年間事業予算の中に組み込んで持ち出しという前提でやっています。

ですから、株式会社の場合、利益追求部分という部分をどう見られるかということだと思っております。

○柳沢委員長 よろしゅうございますか。

ちょっと時間が中途半端で恐縮ですが、一応これで。ありがとうございました。

## ② 花咲き村（東京都日の出町）

○柳沢委員長 2番目に「花咲き村」園田代表、お願いいたします。

○園田代表 おはようございます。

「花咲き村」という、もともとは福祉のボランティアグループから出発してNPO法人になっております。お手元に資料で簡単な、何をやっているかということを書いておきましたけれども、主要なフィールドは東京の西多摩・日の出町という人口が1万6,000人ぐらいの小さな町ですけれども、そこでの活動をベースに行っているわけです。

だいたい30年前ぐらいでしょうか。もともとは福祉の、いわゆる障害者に対するボランティア活動から始まっていて、いろんな経過があったのですが、その過程の中で、特に障害者の問題を扱っていくと、地域の協力とかいうのはすごく大きなテーマになって、だんだん上がってくるようになってきて、ではというか、つまり障害者のことを理解してもらうためには地域の人たちに、地域の問題と僕らも関わりながらつないでいくということをやらないと、なかなか障害者はこんなに大変だよというふうにしても、それはつながらないだろうというような発想がありまして、日の出町は7割が森林で、御多分にもれず、放置林というのがたくさんある町でしたから、要するに山の問題も地域の1つの大きな課題としては大きいかなというのもあって、それから目につくところにはいっぱい放置林というのがころがっておりましたですから、だからそこらから、やれるところから取り組んでいこうということで、そういう取組から森林のボランティア活動、今でこそ森林ボランティアみたいな言葉でいわれてもちょっと通りもいいですけども、15年前ぐらいは、そんなことをいったって……というふうに言われることが多くて、なにせやりたくても、所有者の人たちは、どこの馬の骨ともわからん町のやつらが来て、自分のところをいじくってどうだこうだというすごい警戒心の方が圧倒的に強かったですけれども、たまたま僕らのグループの最初に立ち上げた者のじいちゃんがまだ生きていまして、そのじいちゃんの山から始めていこうということで、86年に東京を襲った大雪害というのがあったのですが、雪害後の整備活動ということから始まっていきました。

だんだんそれが山をやっていくと、やはりどうしても山の周辺のことになっていて、日の出町のところでいくつか昔、田んぼであったであろうというような残りのところがありまして、そういう中で比較的元に戻せる条件のいい、いわゆる谷津田ですが、それらもやっていて、田んぼはおもしろいぞというような、そんなような活動をやってきました。

田んぼがよかったのは、山はやはり東京の山ですから、すごい斜面が急でして、子供た

ちがそこに入ってきて何か活動するみたいなことはなかなか難しかったのですが、田んぼはよかったです。田んぼのおかげで子供たちとの接点がたくさん増えました。今は2カ所で、だいたい1反5畝ぐらいの面積を、小さなことをやっています。一番小さな田んぼなんて2坪もあるかというぐらいの小さなやつですけれども、地元の子供会なんかが大喜びで、あと学童保育のグループとか、それから今、隣の中学校もぜひやれよというので、その中の障害児学級なんかありまして、そこの子供たちなんかは非常に喜んでやってくれておりますが、そういう子供たちとの接点がすごく広がっていったというのは何よりもよかったですというふうに思ったところです。

そういうことをやりながら築いていったことというのは、多分都会の人たちにとってはそれはすごく価値のある資源にもかかわらず、所有している人たちや地元の人たちは、これは金にならないというふうにして放置されているということがとても多いという、その落差はすごいぞというふうに関心を持ったことが非常に大きかったですね。

だからそれをうまくコーディネートすることができれば、今、使われていない、いわば耕作を放棄されているところにしたり、それから放置林という状況になっている山にしたり、あるいはモウソウダケの竹林もやっていますから、そういうようなところも意味を持ってくるのではなからうかということで、花咲き村としては、できればそういうものをつなげていきたいということを自分たちが率先してやりつつも、そういうものを受け入れていく窓口みたいなことになったらいいなというふうにも思って活動しているというのがあります。

そんなわけでした、考えてみると、やはり地域の中に持っている資源ということの価値の見直しというのが必要ではなからうか。森林の場合は、最初、ある程度の信頼が得られたら、フィールド提供というか、うちの山をやるのだったらいくらでも使えよというような声がだんだんかかるようになったのですが、これは背景としては、やはり地元の人たち、山の所有者なんかは、はっきり言って、今は山を持ったって金にならないからなという気分がベースにすごくあるのです。だからやりやすかったといえばやりやすかった。

ずっと山が、いってしまえば、僕らがバブルだといっていたぐらいの、僕はまだ中学生や高校生のころの時代だったら、多分僕らがこんな形で山に関わっていくということはできなくて、山は山の所有者と、それから林業関係者の世界だったと思うのですが、そういうものがある種、要するに経済的になかなか大変だという状況が1つの突破口をつくって

くれたことは否めないというふうにも思っております。

特に東京の山、日本全国どこもそうでしょうけれども、例えば日の出町なんかでいうと、山の所有者というのは圧倒的には5ha未満で、極端にいうとほとんど2haというのが多いのです。日の出町の、山を持っている人はだいたい230軒ぐらいあって、実際に50ha以上ぐらい持っていて、つまり50haぐらいでなければ林業地としては活かせませんから、その人たちはだいたい10人にも満たないという1桁で、あとはほとんどが5ha未満の人たちです。この人たちが何よりも経済的な価値がないというふうになったら山を放置していったわけですから、こういう人たちに山の新しい使い方というのがまたみんなで提示できれば一番いいかなというふうにも思ってきたのです。

それで今のところ、山はだいたいあっちこっちちょこまかちょこまかやりだして、花咲き村がだいたい管理できているというのは7haぐらい、所有者の数からしてみたら10人ぐらいになってしまいますけれども、あっちこちのところをやっているということです。

田んぼ、谷津田の方に関していうならば、これはまだ今だったら戻せるなということもいくらかありまして、この辺ももうちょっとやれたらいいなと思っておるのですけれども、今のところ、まだ自分たちの方のキャパシティがないものですから、そんなに積極的に取り組めないですけれども、いくつか目をつけているところはあるという、そんな状態です。

これからさらに言うと、今、問題になっているのは、今度は耕作をあきらめてしまっている畑ができてきたということです。一番最初は山だった、でも当然田んぼも、米なんか買った方が安いよという話になってしまっただけで放ぼらかされていって、いよいよ、今、やっているじいちゃんたちが亡くなったら継がないという畑が徐々に増えているというところで、僕らにも畑をやらないかという声はかかってくるのですけれども、この辺はまた違う形でちょっと考えていかないといかんかなとは思っていますが、そんなようなところがあります。恐らくこれは次に来るのは空き家だと思うのです。東京のあのあたり、日の出町といっても一応東京ですけれども、にもかかわらず、こういう状態というのは徐々に押し寄せていっているというのが今の現実としてはあるということです。

これは考え方としては一応NPO法人という形でやっていますけれども、基本的には昔からの、僕らよく言うのですが、ボランティアあがりですから、つまりできるだけ経費はかからなくて、それで現実にさまざまな困難を抱えている人たちと一緒にあって、ボラン

タリーな活動をベースにしながら取り組んでいきたいというのが一応基本です。

だからそんなに急激にいろんなことが活動として広がることというのはあまりないのではないかなと思っておりますが、しかし、ボランティアな関わりというのがすごく大事ではないかなというのを結構ベースにしておりまして、だからあまり事業的な形の中で収入を得てどうだというようなことはほとんどこっちの方に置いているというか。だから自分たちはというか、参加する人たちは、労働力を無償で提供するから、今度は土地を持っている人たちは土地を貸すとか、利用してもらおうとかという形のつながり方ができればいいのではないかな。そんなような広がりができるればいいかな。結果として地域がいろいろとわさわさ動き出すといいかなというふうな思いはあります。そんなようなとりあえずの取り組み方ですか。

そういういわばボランティアな取組ということで、要するにそういう田んぼとか、それから山とかいうものを持っている人たちが、ある種所有権ではない別の管理権みたいなやつが、何か少しもうちょっとそういうのがうまく活かせるような、そういう所有しているということと、それから管理するということが違う組み合わせで何か事が進んでいけたらいいなというぼんやりとした思いはあるのですけれども、何かその辺のところは追求していきたいというふうには思っております。

あとは資料を見てもらえば、だいたいこんなことをやっていますよというところであるのですということです。

つけ加えておくならば、ずっと手探りでやってきたので、これからもいろんな意味で手探りが続くかなというふうにも思っております。最初の山の作業のときだって、技術はない、道具はない、場所はないみたいな、場所がいくらか出てきて、いくらか技術や道具も身につけていくというようなことでだんだん進んできたわけですから、また、そういうような過程自体もおもしろいのだよというのが伝わっていくのが一番いいかなというふうにも思っております。

というところで、とりあえずの報告は。

○柳沢委員長 ありがとうございます。

それでは、自由に御発言ください。

○亘理委員長代理 大変広い範囲の活動をされているというように思うのですけれども、これは今は会員の方が150人ですね。それで発足のルーツは障害者福祉のボランティアと

ということなんですけれども、つまり会員の方というのはほとんど林業とか、農業というのには全く本来は携わってなくて、むしろこういう福祉ボランティア、福祉関係の仕事をずっとされてきた。あとは都会の方に勤務されているという、そういうことなのかどうかということも1つ伺いたいです。

○園田代表　ほとんどみんなボランティアという感じで、都会といっても、だいたい都内だけではなくて、横浜の方からとか来ている人たちもいますけれども、そういう地元というか、日の出町の人たちというのはごくごくおれたちが世話になっているおじさんたちが会員になってくれているぐらいのもので、ほとんどが都会の今はボランティアとして通ってきている人たちです。

○亘理委員長代理　その場合、ほかの既存の、例えば農業との関係でいえば農業協同組合とか、あるいは森林であれば森林組合とか、あるいはそもそも町内会とか、地域の自治会などもあったかと思うのですけれども、そういう既存の組織とか団体との関係というのは、これは例えば協力関係とか、お互いに協力し合うとか、そういうふうになっているのでしょうか。

○園田代表　協力関係とっていいのでしょうか。やはり一番最初、僕らがこういうふうな僕らの森林活動、こういう活動ができるようになったのは、何といてもやはり地元の大林業家であった羽生さんという方が森林組合の組合長をやられていて、その羽生さんが全面的にバックアップしてくれたものですから、羽生さんが地域のお大臣という人でしたから、羽生さんの言うことにはやはり文句を言えないというので、僕らがどこの馬の骨ともわからんというふうにいわれていたにもかかわらず、いろんな人たちがいる種、協力してくれたというのは、その方が後ろでいろいろと立ち回ってくれたということが大きかったですね。

だからいろんなわからないこととか、足りないことというのはほとんどそういう地域の人たちにお伺いを立ててというか、最初、道具も何も持っていませんでしたから、いろいろ借りたりなんやしていました。その中で、山の所有者のおじさんなんか、僕らにかまも持ってないのかとってかまを20丁ぐらい寄付してくれるとか、そんな感じの最初はとっかかりでした。

○亘理委員長代理　逆に今度はもともとの発足の趣旨であった福祉ボランティアの方、こちらの方は、こういういろんな地域の多様な協力をやることによって、逆に非常にさらに

福祉ボランティアの方も発展してきたというふうに考えてよろしいのでしょうか。

○園田代表 なかなかその辺は難しいところでして、僕らはつなぐというイメージがあって、ここに書いたか忘れましたけれども、例えば重度の身体障害者の授産施設というのがありますが、そこで要するにバブルが崩壊して仕事がなくなって、今までの下請けとか孫請けみたいなことをやっていた袋詰めみたいな仕事がなくなってきたのです。そのときに炭を焼けと騒いでいたのです。竹はいくらでも自分たちが提供するからということで、それでそこは炭を焼きだしたのです。竹炭を今、製品にしている、授産施設の全体の仕事の割合の中では結構位置を占めるとかいうふうになっていたりとか、それは非常に典型的によい事例といえますけれども、あとはつなぐことはやるのですが、なかなかそれだけでは間を取り持つ世話役がすごく要るのですね。例えば知的障害者の施設というのをやっていて、知的障害者の施設はどこもたいがい畑なんかやっているのです。いわば今風にいえば園芸療法とかそういうたぐいで結構いいのですけれども、なかなかそこをうまく世話を焼いてくれる人たちをひっつけられないというところがあって、やることはやっているけれども、それ以上のことはなかなか難しいなというのがある。

僕らは、とにかくいろんなことで、違うところで知り合った人たちをそういうところにつなげていけたらいいというので、この人に世話してもらえよとか、応援してもらえよみたいなアドバイスはするのですけれども、そんな感じですか。

○亘理委員長代理 どうもありがとうございました。

○鷲谷委員 参加されている方たちは、何を主な目的にされているのでしょうかという質問なんですけれども、体を動かして管理活動をする事そのものが楽しいということもあるかもしれませんし、あるいは何か食べるものをみんなで食べるとか、そういうこともあるでしょうし、あるいは田んぼの生き物調査、または観察会などで生き物に目を向ける機会があるとか、どんなあたりが参加者を惹き付けているのでしょうか。

○園田代表 一番は、やはりまずそういう作業というのがおもしろいということの発見だったと思うのです。つまり労働も対価の伴わない労働はおもしろいというふうに思ったのだと思うのです。僕も一時下請けで森林組合の仕事をやっていたりしていましたから、草刈りとかやっても、全然仕事としてやる場合と感覚が違いますから。だから仕事としてやったら、ここまでやらないと今日は帰れないなとつい思ってしまうのですが、そういう対価のない労働というのは本来的に結構おもしろいなというその発見がまず1位だと思うの

です。

2つには、やはりその場に集まってくる人たちの新しいコミュニティみたいなものができあがっていくというのがもう1つではないかと思うのです。僕は花咲き村でよく言うのですけれども、今の社会の中で報われなかったやつの集まりだというふうによく言うのですが、来て結構落ち着く場所だとかというふうに言われることは多いですね。だから居ついてしまったりとかになってしまっていく、それがだいたい2つぐらいです。

あとそれをベースとしてサポートしているのは、それが世の中の役に立っているという思いがベースとして必ずどこかで、これをやったからありがたいねということがどこかで伝わらなければだめですから、そのときはやっぱり地元のおっさんたちをそういう場有的时候に、飲み会とかのときに一言言わせるという形で、ああ、来てよかったなというふうに思わせないと。

○鷲谷委員 役に立っていると。

○園田代表 役に立っているという思いを必ずどこかで伝えてやらないと、ただただ、自分だけの楽しみで来ているというふうになると、自分がつらくなったり、あるいは仕事が忙しくなったりしたら、そこで終わってしまいますから、そのときに、待っている人がいるみたいな意識をどこかで伝えないとなかなか難しいという、そんな感じの3点ぐらいですかね。

○鷲谷委員 ありがとうございます。

○小田切委員 今回の鷲谷先生の論点は私もお尋ねしようと思ったのですが、大変興味深い御回答だったと思います。とするとボランティアの方々は、集めようと思ったらもっと集まるという状況でしょうか。

○園田代表 そうでしょうね。

○小田切委員 それを今、制約しているのは、やはり管理の適正範囲があるということですか。

○園田代表 いや、それはどっちかという、人的なというか、スタッフがそこまで育っていかないという。つまり山の活動で定期的に月に1回やる活動で、多いときなんて40人近くになったりすることがあったのです。40人近くになったりすると、一人ひとりの顔がわからなくなるのです。それはやはり持続しないです。やはりある程度お互いの、長くやっている者と、それから途中で来た、新しい人たちというのがそこそこの顔見知りになっていくというある種あまり広がらない程度のそこそこの規模があって、それでいけばうまく

いくというのがあるのですが、そうすると、来た人たちにそういう人にもメンテナンスしなければいけませんから、それができなくなるとなかなか難しい。僕らの課題的に言うと、そういういわばコーディネーターをやれるスタッフがなかなか育ってこないというのが一番課題としては課題ですね。これは正直言うと、結構育てようと思うとすごく難しくて、その人が持っている資質もありますし、なかなか大変です。

○小田切委員 ありがとうございます。

○柳沢委員長 今の話に関連しますけれども、スタッフと参加者というような感じだと、スタッフはどのぐらいのメンバーがいるのですか。

○園田代表 全体でいえば、スタッフというか、要するに担当者というか、1つの手入れの活動の中で世話を焼いたりなんとかという形でいえば、20人はいないですね、15人ぐらいで回しているということですかね。

○鷺谷委員 適正な人数というのは、先ほどコミュニティという言葉が使われたのが興味深かったのですが、数十人ぐらいという感じでしょうか、お互いに知り合いになれて、その中にいる人を、心がやすらぐだとか、コミュニティを十分楽しめるといえるのは。

○園田代表 それは本当にスタッフのキャパシティ次第という……。

○鷺谷委員 スタッフがうまくすればもっと多い人数でも大丈夫ですか。

○園田代表 大丈夫ですね。僕がやればだいたい40人ぐらいでも……そんなことはないかな。要するにどんなに頑張っても40人ぐらいだったらだいたい回していける。

○鷺谷委員 そうすると、もしかかなり広い範囲に管理をボランティアにお願いしたいときは、いくつもそういうグループがあるような形があってもうまくいく。

○園田代表 そうなんです。だからだんだん、最初はみんなで束になってやっていたのです。福祉のボランティアも、山も、田んぼも、竹林も、束になってやっていたのですが、だんだんそれがそれぞれの委員会みたいな感じで分かれて、責任者という形の中で、活動日も別途月に1回の活動日が、だから毎週何かがあるというような、そんな感じで少しずつ分かれてしまっている。

○鷺谷委員 ありがとうございます。とても参考になりました。

○土屋委員 いわゆる森林ボランティアの方々のお話を聞いていると、最近、もともとの地域の持っていた文化とか、それから昔からの山や村落の管理の仕方とか、そういうのを学んでいこうという取り組みが増えているように思うのですが、花咲き村の場合はいかが

ですか。

○園田代表 なかなかだいたいもともとが青梅林業地といういわばスギ、ヒノキ林を育ててきた場所ですから、そこからあるものというか、じいさんたちが持っているいろんな今までやってきたことというようなことについてはできるだけ学んでいこうというのはあるのですが、そんなに特徴的にこれがどうだというふうな感じでもないのです。僕らはある種の通訳みたいなことですから、地元のじいさんたちがいろいろやっていてこうだこうだ、山の歴史がああだこうだという話を都会からボランティアに来た人たちに僕たちは知ったかぶりじゃべるのですけれども、そういうことをやってつなげていくというのはあるのですけれども、何か特徴的にどうだこうだというようなことはいいですね。でもそういうしゃべりがっている年寄りが多いですから、その場はできるだけ保証しようか。ときどき結構大変な面もありますけれども、しゃべらせろというので。いつまでも帰ってこないなどと思ったら、高校生が年寄りのじいさんにつかまって、ずっと2時間ぐらい延々と、自分の昔の山のことを聞かされたとか言っておりましたから、そういうのも間々ありますけれども。

○柳沢委員長 もう1点だけ。参加する側の参加の仕方ですけれども、ある程度様子がわかるように定期的につき合わなければだめなのか。要するにシーズンに断続的に行つてという感じでぶらっとつき合うようなことも可能なのでしょうか。

○園田代表 何でも可能です。これは基本的には一応構え方としては、頼まれたことは断らない。来るという人は断らないというのがありますから、できるだけ、やはりこういう活動で、僕らだいたいボランティアあがりですから、頼まれたことは何でも引き受けて、世話して面倒みるというのが一番いいんだというふうに思うようになりましたから、それは本当に妙な頼まれ事だつて、たいがいは聞いていっています。

○柳沢委員長 参加する側にとってはどうでしょうか。ある程度様子がわかるように少し密度を上げないと充実感は得られないのでしょうか。

○園田代表 参加する側というか、やはり僕らは僕らのそういうカラーがありますから、そういうのでなじんでくれる人と、そうでない人もいますのです。つまり例えばそういう山の作業にしたつて、もっと技術的に極めたいという人たちもいますのです。おじさんたちの中では。そういう人は別のグループがありますから、あそこはそういうことをがんがんやっているからあっちへ行けよという紹介はしますね。僕らはそんなに技術をがんがん上げ

るということよりも、さっき言ったような、いろんな多様な資源をうまく使って、それからお互いにそういういい違うコミュニティーができればいいみたいな、そういうものになっていけばいいというような気分でやっていますから、それだったら結構落ち着いて、だから参加する人たちの意欲の違いみたいな。

だから動植物が好きで、調査とかそういうのをちゃんとやりたいとかというのを、それは僕らの仲間の西多摩自然フォーラムというのがありますから、あっちへ行けという、それはいくらでも紹介してやるぞというような感じで、わりかしそれぞれのグループが持っている色合いみたいなのがありますので。

○鷺谷委員 そのいくつもの違うタイプの活動をされているグループとの連携というのは、緩い連携みたいなのが、ただ、個人的に知り合いというだけなんですか。何かネットワークのような。

○園田代表 そのネットワークを10年前ぐらいに、やはり必要だなというのがあって、それで「森づくりフォーラム」という、今、NPO法人になっていますけれども、森づくりフォーラムというのを立ち上げてわあわあやっておったのです。

○鷺谷委員 それに参加されているのですか。

○園田代表 そうです。森づくりフォーラムは今、全国的にやっていますけれども、もともとは東京の山に関わる人たちのネットワークという形で立ち上げていきましたから、そのときに、いろんなかき集めではないですけども、だんだん人的資源の貸し借りもやっていましたから。あすこには炭焼きの上手なのがいるとか、トンボの詳しいやつはあすこにいたりとか、何に詳しいやつはどこにいるとかというのがだんだんお互いにわかるようになって、頼んだりとか、だから花咲き村がそういう観察会みたいなことをやりたいと思ったら、それは僕らのやつよりもっとよく知っている違うグループのやつがいますから、そいつなんかを引っ張り込んできてお願いするとかという形でだいたいやれている。

○鷺谷委員 森づくりフォーラムの方は何か定期的に会を開かれたりということはしているのですか。特にそういうことはせずに緩い関係……。

○園田代表 森づくりフォーラム自体はもう今、全国的なみたいな過大になってしまったものですから、いわゆる地域ネットワークみたいなものの力が弱くなっておりまして、それは何とかしなければならぬとは思っているのですが。

○鷺谷委員 ありがとうございました。

○土屋委員 東京都と連携して森づくりフォーラムも独自の事業もやっていますね。

○園田代表 そうですね。今、東京都の大自然塾という、ベースになっているやつがありますから、その辺でもう1回、ネットワークをちゃんとしたいなというのがあるのです。

○柳沢委員長 よろしいでしょうか。

ありがとうございました。

### ③ 自然回復を試みる会ビオトープ孟子<sup>もうこ</sup>（和歌山県海南市）

○柳沢委員長 それでは、3番目、「自然回復を試みる会ビオトープ孟子」の北原理事長、お願いいたします。

○北原理事長 「ビオトープ孟子」の北原です。よろしくをお願いいたします。

私たちの町といいますと、和歌山県というのは人口103万、それから私たちのビオトープ孟子という市なんですが、ここは海南市といまして人口が5万人、先日の市町村合併によりまして6万5,000人ぐらいに増えたわけなんですが、面積的には相当広いです。だけでもほとんどのところは農村地帯が大半を占めて、経済流通のところの海南市の中枢のところには経済圏といえますか、工場地帯があるのですが、そこをちょっと離れますと、ほとんどが農村地帯の里地、里山ということでございます。

まずなぜこういうふうなものの団体をつくったかといいますと、ちょうど今から大体10年前に、私もまだ若かったのですが、そのときに孟子不動谷という一番奥詰まったところに不動明王がございまして、そのところは680年代に空海が、要するに高野山に登る前にこの地に来まして不動明王を刻んだ。いろんな疫病とか、そういうものを封じるために滝の横に不動明王を刻んだという由緒あるところでございます。

そうしてその一角をなぜそういうふうにしようかなと考えたというか、近年、その一角自体が、大体入口のところから600m、左右合わせまして谷津田の谷が200mございます。そこから私らが今の管理しているところまで約6.5haの田んぼがありまして、そこがどんどん近代化によりまして放置されてきた。なぜそういうふうになってきたかといったら、どこの日本の中でも同じだと思うのですが、耕作地のあがらないようなところ、それからあと農村から、要するに団塊の世代の人間が22年から24年ぐらいの高度成長の時代にどんどん市内に出ていって、農村部分に人手がなくなってしまった。そういうふうな状態の中

で農業を継続するのは非常に難しいという状態にあったわけなんです。

けどもそういうふうな状態で、不動明王へ参る参拝者もどんどん減っていく中で、昔、この辺でよく昆虫を採ったり、植物を観察したり、いろんな学校の宿題を不動明王の一角でやったというようなところで私も育ちましたので、この不動明王の一番下の田んぼをお借りしまして、ひとつ田んぼ再生という格好でやってみようというのが発端でございます。

しかし30年も40年も放置したところは、なかなか元に戻るというの到底不可能なことなんです。急に水田に戻すというのは、これは本当にやっているうちに、もうやったところの跡すらもう1回やらなければいけません。そんな大変なところがありまして、まずは水生昆虫を呼び戻そうということで、1つの0.1haの田んぼを地権者からお借りしまして、トンボ池というのを掘削しました。このときに地権者の方、約1反のところを快く貸してくれましたが、貸すというよりか、地権者の方の人が余計に悪がりまして、こんなえらい谷津田化しているところを、そういうふうにして借りてくれて、なおかつきれいにしてくれるというところがありまして、快く貸してくれたわけなんです。なぜこの不動谷一帯もそのようにさびれてきたかといいますと、今、和歌山県の中の1つの問題としてタイワンザルがございました。その中に、不動谷というところにも、昔のところはたくさんモモをつくっていたのです。畑のところはモモをつくり、それからイモをつくり、いろんなことをやっていたのですが、タイワンザルの問題とか、今、よくいわれていますイノブタ、これの被害によりましてどんどん放置が進み、ほとんど入口のあたりしか水田が残っていないような状態が30年、40年続きました。

そこを図のようにですが、0.1haのところをトンボ池を約40m<sup>2</sup>ぐらい、大体15坪程度の池を掘ったのですけれども、そのところで大体45種類ぐらいのトンボが出たのです。種類の的にはそのくらい出まして、それであればもっともっと掘って、和歌山で見られるトンボ類が80数種類といわれている中で、四万十のトンボ公園に負けられないようなトンボの一大楽園をつくらうというのが発端でございました。

そうしているうちにどんどん人が集まるようになりまして、いろんなところのフォーラムとか、いろんなところに行って、講演を聞かせていただいて今に至っているのですが、その中で一番私らのスタッフが感じたというのは水の大切さというのがありました。その中にすべてのものが生きているのだ。それを感じたのが、滋賀県の6年くらい前ですか、鷺谷先生のフォーラムの中で聞かせていただいた水生昆虫という部分、これが大きかった

と思います。

そういうふうには子供の学習の場とか、そういうものを取り入れながらずっとやってきたのですが、その部分も0.3ha、0.5haと農地のところをお借りしまして、どんどん毎日、毎日休みなく、私もサラリーマンでありますので毎日行くわけにいかないのですが、大体この当時から、60歳定年を迎えた4人、5人の者が年間を通して300日からほとんど休みなくしょっちゅう田んぼを再生するのだという意気込みでずっとやってきたわけでございます。

そうしてトンボ池がほとんど完成するに従い、今現在のパンフレットのところの一部なんですけど、今のところ、自然観察地とっているのですけれども、1.8haのところ、伐採から始まりまして、いろんなものをつくろうというところで、みんな力を合わせてやってきたところでございます。

なかなか30年、40年といいますが、いろんな文献とかいろんなすばらしい本を読むのですけれども、一番大変なというのは、本とかに書いている内容は非常にすばらしいものがあるのですけれども、実際やってみてこの大変さ、みんなイバラとか、いろんなものがあるのですけれども、実際に草刈り機で刈るのですが、きょうはこっち側、この目の左の上をハチに刺されたとか、今度あくる日に行ったらこっちもはれていたとか。しょっちゅうそんなのでイバラ窟の中を刈るわけなんです。

そういうふうには私らのところは一遍それでやってみようという最初のとっかかりの人間が3人から5人あったということで、一番最初のトンボ池を掘ろうという考え方は1人、2人だったわけなんですけれども、どんどんそういうふうにして活動をやっていくうちにおいて、いろんなイベントを交えてやっていくうちに、どんどん活動が進んできたということです。そして子供たちに教える側、子供たちがたくさん寄ってきますから、トンボを採ったり、昆虫を採ったりやりますから、そこにおのずと子供にこういう環境教育を教えるという楽しみ、それが出てきたのです。

そういうふうなものがあるんですけど、今現在、有名人の1人のモニタリングばかり専門にここをやっている者があるのですが、その者も仕事をころっと変わらして、そういうモニタリング専門の、環境アセス専門の一人立ちをやってしまったというような者もございます。

それから、あと、ここで育ったというような学生なんですけど、自閉症みたいな子供が中学校1年のときに来まして、そのときに人に対しても、先生1人が連れてきたのですが、

その先生の後ろにかくれるような格好で、皆と接するのが非常に苦手な子があったのです。しかし、その先生もそういう生物を通しての学校で教えている関係の中で、その子供がどんどん前へ出るようになった。今、海南高校というところの3年生なんですが、それからこのところの環境の昆虫とか、野鳥とか、いろんなものを調べるようになって、今、和歌山県で第一人者になっているのです。だからこの前も東京で、文部科学省の方で和歌山の藤田昂己ということで表彰されたわけでございます。

学校教育を取り入れながら、私たちのビオトープ孟子というのがどんどん進んできたわけなんですけれども、今、ここにきてビオトープという部分から、生物が生きていく環境づくりというものから、では人を介してどのような格好でこの里地、里山を残していこうかなという考え方に今現在、特化しています。

里地、里山といいましても、やはり何といいましても、人がそこで養って、いろんなものが経済的なものを潤っていた部分でございますから、どうしても人を介してでないほとんど放置林、放置田、そのように原生化といったら何ですが、どんどんそういうふう荒れてしまいます。荒れる中で、自分たちの里山をどうしようかな、ああしようかなという考えが常に私たちのスタッフが持っていた1つの課題でございます。

そしてこの不動谷という部分の1つのところは、非常に植物とか、それから野鳥とか、いろんな部分にわたって豊富どころがございます。まして歴史につきましても相当なものがありまして、和歌山市の一角から素盞鳴尊が上陸してきて、そういう神社もございませぬ。そこからずっと山をハイキングするわけなんですけれども、その山の頂上には、大旗山といいまして、南北朝の時代に、楠木正久という武将が篠ヶ城にたてこもって700人ほど討ち死にしたというような山とか、それから、あと不動明王をまつている不動谷とか、そういうものをひっくるめまして、里地、里山を私たちのゲレンデの場として皆さんに提供するというような状況でやっています。

それから、放置田といいましても、相当和歌山の中には荒れているところが山間部に行けば、ところどころではなくて、一面に広がっています。これではすぐに再生しよう、すぐに農業をしよう、すぐに皆さんにきれいな農村地帯を見てもらおうということになっても、なかなか手はつけられません。よって、いろんな団体が、いろんな方たちが、この里地、里山というものに目を向けてもらえるような状態を国がらみでやっていかなとだめなのかなということを痛切いたします。

農業形態もそうなのですが、谷津田という放置田のところの難しさ、農業委員会のところの難しさというのもございまして、私たちは農地、2.5haのところを今現在、管理しているわけなのですが、ここのところは今のところは地権者が5人ございます。常にどのように使ってくれてもいいですよというところがあるのですが、なかなか農業委員会のところの部分とギャップが大きいです。1つには建物の制約とか、1つには農地という、40年も50年も放置したものでも登記上は農地ですから、米とか、そういう部分以外には使えません。けれどもいろんな制約の中、県とか市とかで話をしながら、いろんなもの建てながら、いろんな耕作というか、米とか、ソバとか、そういうものをつくりながら販売できるような状態を今現在とっております。

けれどもいろんなそういう農地の部分につきましても、やはり和歌山県とかの県レベルではなくて、国の方策からどのような格好を打ち出していくかというのが1つの大きな柱ではないかなと考えています。

それから、いろんな取組なのですが、私たちには今現在、そのように農地を管理するという、2.5haのところを管理しますと相当な労力が要ります。ほとんどのところがスタッフといわれるような状態の25名、これがまずめいめい、いろんなところを自分が好きなところを、きょうは草刈りをやりたいんやとか、きょうは側溝をやりたいんやとか、いろんなところがありまして、そのような人が集まってきて準備をやっているのですが、なかなか会員さんはふえることはふえるのですが、その中で、では一緒にやっ払いこうというのが非常に難しいところは実際ございます。

だから見よう見まねで楽しかったなという部分でもいいのかなと思うところがあるのですが、そのうちにまた戻ってくるというような循環の中で、まずはこれからの世の中の流れとしまして、やはり団塊の世代の方たちの生きがいと健康づくり、これから学ぶという部分をどこにもっていくか。組織の中で生きてきた人たちをいかに自然の中にこれからはもっていく、学びを教えたいなと考えております。

その中で去年、おとしから「人と土の大学 こんにやく座」というのを書いているのですが、ここでは生きがいを求めようということで、海南市のところから委託契約をもちまして、去年、おとしのところをやったわけなんです。これはどういうことをするかといいますと、1つの60歳をめぐりに定年された方が、楽しく里山という定義を何だというものを追求しまして、このこんにやく座で講師を交えながら勉強する。そしてなおかつそこ

の周辺で私たちのゲレンデの周辺で、いろんな草刈りをやったり、稲をつくったり、お米をつくったり、そういう実習をしていくということで、1つの土の大学というのを設立しました。

あと取組の植物とか生物調査というのは年間今、80数回、実際、これは朝の4時、5時ぐらいから、専門的な者がおりますので、野鳥の観察から始まりましてすべて昆虫まで、いろんな部分でモニタリング調査をやっています。この部分につきましては、和歌山県的生活環境総務課というところに全部データを送りまして、管理してもらっているような状況でございます。

それからあと貸し農園なんですけれども、貸し農園も毎年ずっと行いまして、ことして6年目になるのですが、ここのところで一番ネックというのは何かといいますと、やはり農業委員会のところがちょっとネックになります。というのは、私たちは地権者から、そういうふうに加えて、農地を借りているだけであって農業法人でも何でもなし。けれども今度はビオトープ孟子というところの団体が違うそういう部分に皆さんに貸し与えてそれでいいのかという部分、この間うち海南市からしかられた1つもあります。

けれどもそこで経験するというか、無農薬栽培をして、自分たちが持って帰ってそれを食するという食の安全性を追求した上での皆さんの喜ばれるというのはもっともっと広くやっていきたいなと考えています。

それからあとエコトレッキングといいまして、これは相当な私たちの歴史のところを持っています。今、歴史を調べたものが1つの冊子になっているのですが、250ページぐらいになっています。その部分のいろんな歴史の部分、海南市とか和歌山県の方がエコトレッキングで僧兵の道というのを歩いていただいて、常に40人から50人ぐらいのエコトレになるのですが、そこに語り部を4名から5名つけまして、地域、郷土の歴史というのを学ぶような格好でやっております。今週の日曜日なんですけど、エコトレッキングをことし1回目をやる予定になっています。

それから、あと生きがいと健康づくり事業というのは、先ほど言いましたとおり、土とか、水とかいろんなものを通して、最終的に自分たちが自然の中でどう生かされているか、どういうふうな関わりを持ちたいかというのをテーマにしまして、その人、個人、個人の健康をつくっていってもらおうという事業です。

それからあと、去年の7月から、ひとつ追加といいますか、これはどうしてもやってい

かなければいかんという1つの問題がございまして、というのは私たちは今現在2.5ha、ことし中には3haぐらいになると思うのですが、その貴重な財産の、地域の歴史ある財産を貸していただいている関係で、私たちのビオトープ孟子が海南市、街では地域、村の中にどのような格好で恩返しができるかなという考え方のもとに、1回コミュニティービジネス、村おこし事業をやってみようかということで、前年度に和歌山県に申請しまして、今、県の委託事業という格好でやっております。

今年の4月からは「こんにやく座」という名前で行っていますが、この村おこしのコミュニティービジネスというのは3年も5年もかかります。けども簡単に私たちのやるという方向性につままして、1つのものを完成する部分にまであげていかなければ、あの団体は何だったのかなというところで終わってしまうかなと思っています。

そこでコミュニティービジネスを立ち上げたという部分が3点ありまして、1つにはこのパンフレットにあります孟子不動菊炭、もともと会員の中から炭を焼きたいな、山をどんどん伐って人が歩けるような状態にしたいなというところから、木を伐ればおのずとそこに木が放置されます。それを今度炭にしようということで、1年半かかりましてこの炭窯をつくりました。

ただ、炭を焼くというはおもしろくありませんので、そこで池田の菊炭といいますお茶の先生用の炭、要するに池田不動菊炭、それを求めてやっていこうということで、去年、もう1年ちょっとになるのですが、クヌギ専門で焼いて、お茶の先生用に提供しようということでやっております。それも山の活性化という、利用されない里山をどうしようかという考えのもとでコミュニティービジネスをしたわけでございます。

そしてあと農耕地につまましても、放置されているところは無農薬米栽培をやろう、普通の米だったらだめや。だから無農薬栽培を有機だけでやろうということで、これはことしで4年になるのですが、大体の感触がありましたものを村おこし事業へもってきたということです。

どんどん未利用地対策というのは、私たちのところは1区画6.5haのところは、ほとんどのところはビオトープ孟子さん、何とかつくってくれないかとか、ずっとそういうふうな状態のものが続いております。しかし、今のところはどんどん私ら借りるわけにもいかないのです。というのは相当時間がかかるし、相当な労力が要ります。よって常にそこに携わる人が100人、200人とあれば、6.5haぐらいはへともないと思うのですが、なかなか

その人というのが非常に難しいところがあります。だから次にそういうふうになれば、その未利用地の対策をどうしようかなというところが今の問題点の1つでございます。

もっともっと人を呼びながら、もっともっと違った方面の団体をつくりながらでもこの未利用地対策というのをどんどん進めていきたいなと考えております。

それからあと、今後の課題としましては、これも人材バンクという1つのものがございます。私たちの部分出張講座もたくさんありますので、いろんな講師たちがもっともっとほしいわけなんです。だから小学校とか、老人ホームとか、それからあと学校の教育委員会の方だとか、いろんなところの部分がございます。そこにはりつける講師、それも必要ですし、そしてまたビオトープ孟子の現地での先導する講師等々、いろんな人材バンクをこれからの世の中の団塊の世代へ求めたい。だからもっともっとこれからは発信していくんやということで今現在、その下にずっと後の部分であるのですが、考えております。

○柳沢委員長 時間ですので、よろしいですか。御質問をどうぞ。

○鷲谷委員 地域の自然な部分をしっかりと認識して、それを生かす道を探りながら多彩な活動を展開されていらっしゃることをお聞きして、こういう谷津田とか里山を活かす活動、自然再生というふうについてもいいと思うのですが、その可能性の広さというのを感じることができました。

それで理念とか将来の展望などについてある程度理解できたのですが、細かいことを質問させていただきたいのですけれども、パンフレットもいろいろ拝見いたしまして、この資料館というのがございますが、これはどなたがどのようにしておつくりになったのか。

質問が2つあるので、それともう1つ伺いたいのは、無農薬でお米をつくったりというコミュニティービジネスとおっしゃっているものなのかなとも思うのですが、産直の相手としてどこかの都市の生協とか、そういうようなところと関係を持っていたらいいのかなとかどうかというようなことが2点目なんです。

○北原理事長 まずビオトープ孟子の山案山子という資料館なんです、山案山子となぜつけたかといったら、私たちのところは里山なのでへビはシマへビとかいろんな部分があるのですが、ヤマカカシが多いのですね。だから案山子というのは田んぼの中にあるのや、田んぼを守る神様で案山子がある。山を守っているのがいろんな部分をそういうヤマカカシというへビもありますので、すべてを守ってもらうという意味で、この山案山子という資料館に名前につけました。

なぜこれをつくったかといいますと、私たちのところは子供が多いです。学校教育とかいろいろところでこれからはどんどんまた小学校とかで遠足に来るのですが、その中でピオトープ孟子、不動谷というの一目で説明できるというものがほしいということがありまして、この資料、全部ここで採集したものなのですが、これを一堂にするプレハブ小屋を建てております。

○鷺谷委員 建物も資料も皆さんが自分たちでおつくりになった。

○北原理事長 そうです。

○鷺谷委員 なかなか行政でも持ってないような充実した資料館、この写真を見た感じでは思ったのですが。

○北原理事長 りっぱではないのですが。

○鷺谷委員 手づくりのものですね。

○北原理事長 もう1つ、これが15坪あって、15坪の部分が2棟あるのです。ひつついているのですが、その今、向こう側の方もやはり資料館として今、活用しているのですが、今はそうではなくて、非常にそば打ちをやりたいという人がどんどんふえまして、ちょうどこのくらいの部分の空間なんです、ここへみんなを集めながら、里山でそばを打って、ここのそばを食べるのやという部分を今やっているわけなんです。

だからもっともっと資料館を充実したいのはやまやまなんです、なかなか制約もありまして、田んぼにむやみやたらに建物を建てるな、ではあんたらそういうやつを海南市とか農業委員会のところで方向づけをきっちりしてくださいよということを言っているのですが、なかなかギャップのところは多いです。

○鷺谷委員 事業は会費等で負担されている。

○北原理事長 そうです。

私たちのところは行政は全然最初からタッチしていませんので、私たちはだれにもつぶされない里山を目指すのやというところが発端でございます。

あと無農薬米なんです、大体0.3ha、去年つくりました。無農薬米というのは化学肥料を全く使いません。何を使ったかといいますと、この今、飲んでいるコーヒーバイオというコーヒーのかすです。かすを発酵したものを活性酸素を取り込むためにそれだけをやった。そしてなおかつ肥料としましては山の落ち葉を腐葉土化しまして、それをまいた。そしてもう1つまいたのが鶏糞です。それだけでつくりました。

そしてなおかつこの収穫というのは非常に少ないのです。大体半分になります。半分になりますけれども、できるものは非常においしい米、谷津田のところのお米ですから非常においしい。だから売っているところは、私らは1kg700円します。けどもほしい方という、食の安全性が今、問われている中で、去年は新聞に出したら、一遍にすぐに売り切れたのです。だから去年の17年度なんです、それも9俵かそこらしかできなかったの、それだったら去年ほしかった人にもう1回、販売しようということで新聞に出さずに全部消費しました。1回買ってくれた人というのは非常によく知っている方で、いろんな部分でアトピーがあるとか、いろんな部分を評価してくださって今現在、次の来年もほしいよという方がたくさんあります。

けどもここで、先ほども言いましたとおり、私らは任意団体のそういう自然をやっている団体だけであるので、農業法人でも何でもないので。だからそういうところから突っ込まれましても非常にいたしかゆしのところがあるのですが、もっともっと大々的にやって有機認証までもっていく。だから去年もその話があったのですが、ことし有機認証というところを目指しながら、それをコミュニティービジネスに乗せながら、私たちの地域をこれでやるのや。これでやっていきたいんだということで最終的には地域に戻したいという考え方でございます。

○土屋委員 活動の基盤になっているのは、集落とかそういうものですか、孟子荒糸というのですか。

○北原理事長 そうです。

○土屋委員 これはいわゆる字とか、大字だとか。

○北原理事長 そうです。字といわれている部分なんです。

○土屋委員 皆さん、大体そこに住んでいらっしゃる、100家族と……。

○北原理事長 そうではなくて、このボランティアという非常に難しいところ、和歌山県人は、余談になるのですが、温暖化の気候のせいで非常に激しい性格の人が少ないです。というのはボランティアをやれば非常にわかりやすいところがあるのですが、今までなぜ僕たちがこういうふうになつたかといいますが、よそもの、若者、変わり者といって、和歌山県人でない人が非常に力になります。そしてその次に若者です。もうあんまり年がいき過ぎたら耕作ということは非常に難しいところがあります。それから、あと変わり者、変わった人間でないとい

なことはしないと思います。まずはそういうことだと思います。

○亙理委員長代理 2点伺いたいのですが、1つは里山自然公園というふうに銘打ってピオトープ孟子というパンフレットがありますけれども、里山自然公園というのは県の条例かなんかあるのですか。

○北原理事長 そうではないです。ただ単に私たちは自然公園という、その中で昆虫とか、植物とか、いろんなものがありますので、固有名詞でそういうふうにつけさせてもらいますよということで海南市に了解を得まして、そこで皆さんが観察する場ということなんです。

○亙理委員長代理 もう1点は、この冊子の方の5ページに指定管理者制度に言及されていますけれども、具体的にはこの資料館とか公民館のことを考えて。

○北原理事長 そうです。今、いろんなところ、去年の前半のところから海南市の行政といっぱい話をする中で、指定管理者へもっていきたい。なぜそのようにするかといいますと、私たちは海南市が今、行政が持っている子供に対しての公園があるのです。そのやり方はそうと違います。だから子供に対して何を教えたいかという公園にしてほしい。だから私たちのところはそういう講師をいっぱい持っている。自然に対してとか、いろんな部分に対して今、行政の方がそれを主導でやるのであればいいものがないのではないかとということでずっと話をしていたのですが、行政の人員削減とかいろんな問題がありまして、2年先へ送るくらいのところまでになりました。しかし今、行政との話の中では、私たちのところはどうしても何をしてでも指定管理者のところに手を挙げるのでしょうかとされています。実際挙げます。そういうふうにして皆さんの子供に対してどうするんだ、学校で教えられないような公園づくりにもっていきたい。

だけどなぜそういうふうにするかという、今度は団塊の世代のいろんなノウハウを持った、いろんな知識を持った方がどんどん退職していきます。そういう人の人材バンクが実際ほしいのです。それがこれからのいろんな村、そういう機能を見直すという原動力になるのではないかなと考えています。

○亙理委員長代理 どうもありがとうございました。

○柳沢委員長 ありがとうございました。

#### ④ えがおつなげて（山梨県北杜市）

○柳沢委員長 では4番目でございますが、「えがおつなげて」。曾根原代表、お願い致します。

○曾根原代表理事 山梨県北杜市からまいりましたNPO法人「えがおつなげて」の代表をさせていただきます曾根原と申します。

山梨県の北杜市というのは、皆さん、まだ聞き慣れない市の名前かもしれませんが、最近の広域合併で合併になった市なんですけれども、清里だとか、そういったエリアがある大泉村とか、小淵沢、小淵沢はまだ来月合併ですけれども、長野県との県境にある市町村が7町村合併してできた北杜市です。有名なところだと清里だとか、南アルプス天然水の白州町だとか、そういったところがあるエリアです。

そこで2001年に設立をしております。資料の方にも書かせていただきましたけれども、目的としまして村・人・時代づくりというのをスローガンに掲げまして、これからやはり地域が共生していく社会をつくっていく。しかもそれは市民が中心となりながらネットワークを組んで社会をつくっていこうよというような設立の趣旨で活動を行っております。

そういったような大きな目標はあるのですけれども、とはいうものの、やはり大きなことばかり言っても何も始まりませんので、やはり戦略的にはこれから必要となるだろう、地域社会づくりみたいなモデルをつくっていこうというようなことをみんなでいろんなことをやっております。

その中で恐らく今後、非常に重要なツールになってくるだろうと思うのは、都市と農村の多面的な交流だろうというふうに思っています。

農村においては過疎化とか、高齢化だとか、その結果として遊休農地の増大だとか、森林の荒廃だとか、もろもろ課題があります。都市においてはストレスの増大によるいろんな青少年の犯罪だとか、もろもろ課題がありますが、やはりそこが都市と農村が多面的に交流をすることによって新たな道が開けるのではないかな、こういうことを考えて行っておりまして、それで山梨県に本部があるNPO法人なんですけれども、会員さんたちの過半数は首都圏が多うございます。きょう、こちらにいらっしゃいます土屋先生が所属している東京農工大学の、堀尾先生とか、千賀先生なんかも一緒に活動しております。この資料の冒頭の左上の写真も農工大の学生さんたちが我々のフィールドで開墾をしている、黒森もりもりクラブというの彼らがつくって今、活動している写真なんですけれども、そ

ういったような首都圏域のもろもろのいわゆる産・官・学、NPOと連携しながら都市、農村交流的な活動をしておる団体でございます。

今、お配りいただきましたけれども、最新の我々のNPO法人の会報的な位置づけのパンフレットをお配りさせていただきましたので、こちら合わせてごらんいただければと思います。

資料の方に戻りますと、資料1ページを開いていただきまして、2001年にNPOを設立しまして、2003年4月、小泉内閣の方で始まりました構造改革特区の第1号の認定を我々のNPO法人でいただきまして、もっとも申請は自治体が行うものですから自治体が行いまして、合併前の旧須玉町というところでは、こちらが申請をしていただいて、その中で我々のNPO法人がある一定の活動をする。こういう枠組で構造改革特区の認定をいただきました。

この認定要件は2つです。いわゆる農業特区といわれるものと、もう1つは国立公園の容易化といわれるものです。

農業特区というのは、すなわち農地の賃貸借というのは農業者及び農業法人でなければできないのですけれども、その当時。それ以外のNPOとか株式会社等で契約ができるというようなものが農業特区の制度で、その特区制度を適用していただいたものです。

それで正式にNPO法人として地域から農地を賃貸借をして、農業だとかグリーンツーリズム等の活用をしておるわけです。

もう1つが国立公園の特区というのは、このエリアが秩父・多摩・甲斐国立公園という国立公園内に入っております。自然を守るという意味では非常に有効だと思いますけれども、やはり我々がこのエリアに入って、いろいろな意味で地域活性化をしていこうということを考えた場合に、やはりハードルになるということも場合によっては出てきます。

例えば簡単な例ですと、何かイベントをするのに、仮設のトイレを置くにもものすごく煩雑な申請業務が必要だとか、そういったようなことがありまして、そういったことを緩和してもらおう、国立公園内におけるイベントの容易化という要件がありまして、それを認定をいただいております。

この2つの認定をいただきまして、活動は2003年4月、北杜市内の須玉町というエリアで始まりまして。その構造特区の名前が増富地域交流振興という名前です。

また、やはり活動の拠点も必要だろうということで、市の行政の人とも話をしまして、

ちょうど高齢化、過疎化のために運営がかなり厳しくなってしまったこの地域の温泉施設がございました。それが鉱泉みずがきランドとここに出ていますけれども、その施設があるのですけれども、その施設も我々のNPOがこの活動を行うにあたっての拠点として活用をしていく。また、鉱泉施設としてだけでなく、ここをいうならば、都市、農村交流センター的位置づけとして活用しながら、こういった活動を推進していこうということで、そのときから委託管理契約をしまして始まっております。ちなみに来月、市の方から指定管理者制度を、現在仮調停中で、正式にこれから契約を結ぶところです。

どんな活動をしているかといいますと、次のページを見開いていただいて、やはりこのエリアがこうなってしまったというのは、このエリアが非常な過疎化で、33世帯しか今は人はいなくて、ほとんど70、80、90代のおじいちゃん、おばあちゃんしかいないというエリアです。ちなみに農地でいいますと、このエリア61ha農地があるのですが38haが遊休化、3分の2が遊休化しているという3年前は状態でした。そこから連想していただければ、このエリアの過疎化の状態がわかるかと思えます。

そういった状態ですので、いろんな活動をするにあたって、いろんな協力を得なくてはいけないだろうということで、そのときからここにありますような農村ボランティアみたいなものをホームページ等で募集を我々のNPOが行っていました。

それで最初は集まるかどうかと非常に不安だったのですが、予想を裏切られて思った以上に非常にたくさんの若者を中心に人が全国からやってきてくれまして、いろんな活動を行うことができました。

次のページを見ていただきますと、そのうちの1つなんですけれども、一番上の4枚の写真が放置された山林ではなくて農地です。孟子さんでもこういったところが見られているかと思うのですけれども、このようなところが38haあったわけです。こういったところを中段の写真が開墾風景ですけれども、農村ボランティア、多様な若者から中高年の人までいろんな人が来ましたけれども、一番左の写真がまず木を伐って、草刈りをして、ツルがはびこっていますからツルを取って、最後はトラクターをかける。こういうようなことを行いまして、現在は3haまで開墾が3年間で終了しております。

また、そういった開墾が終了した農地をまた農村ボランティアの手も借りながら、もちろん地域とも一緒になりながら、今、農業を復活をさせようということで行っています。一番左の写真はハーブを植えています。その右はトマト畑、その右は、この地域の

地ダイズを復活させるというダイズです。一番右がトウモロコシ畑での農業収穫体験の1つの写真です。こういったような多様な活動をして思います。

次のページを見開いていただきますと、今の畑の一部なんですけれども、遊休化した農地がいろんなこういった3haが作付けをされておるという1つの例でございます。

次のページをごらんいただきますと、2004年の5月から9月に限って統計化してみたのですが、この時期にこういったエリアから農村ボランティアに応募が来たかというものをグラフ化したものです。トップはやはり山梨県から近いということで東京、神奈川、また、山梨、千葉、埼玉というふうになっておりますけれども、最も遠いところだと南は沖縄、北は秋田から実際にボランティアが交通費自前で来ましたので、素晴らしいことだというふうには思います。

次のページを見ていただきますと、これを年齢構成で分布をとったのですが、やはり20代前半が非常に多い、大学生等なのですが、20代後半も山ができて、30代前半も若干山があるという状況です。

次のページを見ていただきますと、男女構成比、ずっと気がついておったのですが、これは統計を取ってみて再確認できたのは、女性の方が多い。これはどういうことかということとはまたいろいろ考えてみたいなと思いますけれども。

次のページを見ていただきますと、こういうことを行いながら、予想以上にたくさん来てくれたものですから、こういった若者たち等が来る背景について、データを見ながらみんなでいろいろ考えてきたものなんですけれども、フリーターが417万人とかニートが85万人、こういうような母数があって、こういう動きがある意味支えられているのでしょうか。負の資産を負の資産で処理しているみたいなどころがあるかもしれませんけれども、こういうような背景があるのではないかなと思います。

また、次のページを開いていきますと、やはり作付けしたものを販売していかなくちゃいけないというので、東京に今、いろんなスーパーだとかもろもろのところと提携をしております、えがおマルシェという、マルシェは市場という意味ですけれども、定期市の形で昨年から定期的に販売を行っております。

次のページを開いていただきますと、そのうちの1つであります東京のオーガニックスーパーのマザーズというのがあります。そこでの業務提携をしまして、そこで定期市を開いたりしております。

次のページを開いていただきますと、また、ただ、販売するだけではなくて、洋菓子屋さんだとか、この写真は洋菓子屋さん、パティシエと最近はいわれておりますけれども、パティシエと共同して商品開発を今、進めております。

また和菓子屋さんといろいろなお菓子類、また、料理研究会、食品会社、スーパー等と食品開発を進めておまして、今、一部販売も始めております。

こういったような活動を今、構造改革の北杜市のエリアで行って、3年間たったところ  
です。

今、こういう活動を始めて興味を持った人、また、企業にとってはメリットがあるだろうと思われるところは最近、非常に提携で申込みがふえておるところです。

また次のページは案件が変わりますけれども、こういう活動をしておりましたところ、農村の過疎化とかによる弊害の事例は北杜市だけではないんだ。いろんなところが、もっとうちのところにもあるのだというようなことでいろんな相談が来るようになりまして、これは山梨県の大月市にあったものの事例なんですけれども、それを紹介をさせていただければと思います。

山梨県の大月市に約10haの遊休の農林地がありました。今はもう遊休ではありませんけれども。これはもともと昭和40年代に、東京の金融系某不動産会社2社がこの土地を買収をしまして、大規模宅地開発のために買収をしたのです。買収するときには、農地法第5条の開発許可も取って、森林の方も許可を取って進めたのですけれども、買収が終わってすぐさま頓挫してしまった。こういうところなんです。

頓挫の理由はなかなかふるっているのですが、水が出なかったという、とんでもないことだと思いますけれども、そういうようにすぐ頓挫してしまっ、数十年間、放置されたままになってしまった。昨今の不良債権を処理しなくてはいけないだとか、そういったようなことも流れにあるのでしょう。金融系の不動産会社も、これを処理しなければいけない。こういうような時代の流れにおきまして、処理しようと思ったら、そういう名乗りをあげてきたところは、産廃業者と宗教法人しかなかった。これだけ地域に迷惑かけてそこに譲ることはできないだろうということで我々のところにも相談に来られたのですけれども、我々のところに相談に来たというのは、もしかすると、こういう都市、農村交流みたいなことをここで行ったら、やってもらえたら何か活用できるのではないか。こういう直感があったのだと思うのですけれども、その相談に我々のNPOとしても、では乗りまし

ようということで、あるプランをつくりました。そのプランが大月エコの郷というプランを我々の方でつくりました。

いくなればこの10haを多面的な都市、農村交流を行うフィールドとして設定をして、また、地域でもって地域を主体にNPOを新たにつくって、もし都市のいろいろな人の協力も得ながら、そこを有効活用していこう。こういうプランニングなんですけれども、そういうものをつくったところ、不動産会社の方も、それでいきましょう。またそれを山梨県農政部、森林環境部等に話をして、それも支援していきましょう。もちろん地元の大月市、また、地域、地元の区、また、私の所属しております山梨大学等、そういったところも連携構造をつくりまして、協議会をつくりまして、約1年半ぐらい、どういう事業を行い、どういう組織体制をつくっていくかというのを協議会をつくって、その中でもんでいまして、それで徐々に結論が出てきて、やはり地域でNPO法人をつくっていこう、そこでここを管理しながら有効に活用していこう。最終的には地域の活性化につなげていこうということで、やはりここも構造改革特区を申請しようということで、大月市の方から申請をしていただいて、おととしの12月、認定を受けまして、現在はNPO法人大月エコブリッジというNPO法人が立ち上がりまして、ここでも活動は始まっておりまして、現在もう既に農地分4haはすべて開墾が終了しております。

そういうことで、次のページを見ていただきますと、大月エコの郷特区のこれは大月市の西室市長と小泉首相の認定式の様子が出ております。

その左側が大月の構造改革特区の区域計画になっております。

以上が、いわゆる我々が一度モデルとして行った活動を移転したというような活動でございます。

次のページを見ていただきますと、我々のこれからの地域社会づくりをつくっていく上において、先ほど戦略的に非常に重要なツールは都市、農村交流というお話をしましたけれども、それを進めていくにあたっての、やはりブレークスルーのポイントが必要だろうということで、この中で重要なのは5つの接点、食と農、環境教育・自然体験、田舎暮らし・スローライフ、健康・癒し、文化・アート・芸能等、どうもやはり都市住民にこの5つの切り口にニーズが強いなど。このニーズに照らし合わせてプログラムだとか、また、場合によっては商品開発だとか、そういったようなものを今、進めておりまして、それをまた都市側のコーディネート機関と、農村側コーディネート機関を設置をして、それをま

た連携をするマネジメント機関を設置をして今、進めております。

また、この活動の延長の中で、先ほど都市再生というお話をしましたけれども、今年度、私ども都市再生事業を国交省さんの中で、都市・農山村交流による観光立県山梨調査というのを行っていきまして、山梨県における都市・農村交流の社会システムのインフラをつくっていくということで、空き家バンク制度とか、ワークホリデー制度とか、農家民泊制度とか、インターン制度とか、またグリーンツーリズムとか、こういう事業のコーディネート制度みたいなのを今つくっております。恐らくこの流れでもって私は活動をしておって、やはり国交省さんでも最近いわれはじめたマルチハビテーション、交流から2地域居住、マルチハビテーションの流れに進むのではないかなと思っています。そのある意味ではインフラ整備みたいなことをこの事業で行おうかなというふうに思っております。

それによって過疎化、高齢化が進んだ結果、遊休農地だとか、放置された森林というのが保全、活用されなくなってしまったのですけれども、新たな産・官・学が確実に関与できる仕組みをつくってあげて、ボランティアベースから、ある意味では事業化ベースに進む仕組みができればいいかなというふうに考えております。

以上でございます。ありがとうございます。

○柳沢委員長 ありがとうございます。

それでは、御質問どうぞ。

○小田切委員 曾根原さんのところの活動は私もずっと注目しているわけなんです、1つのポイントとなるのが、専門流通業者のマザーズと結びついている。つまり販路があって、そのことによって遊休農地の再開発もできるということだと思っております、そのマッチングはだれが、どのように行ったのでしょうか。そこを教えてくださいたいのですが。

○曾根原代表理事 一言で言うと属人的要因というやつです。知り合いの知り合いという、吉本哲郎さんという、熊本の地元では有名な方がいますけれども、その人の集会がありまして、私もたまたま呼ばれて、マザーズの小野社長も呼ばれて、そこでおまえさんたち一緒にやれよということで、では一緒にやりますということですね。それについてはそうですけれども、そういうマッチングの一局面だけ見るとそのような答えにならざるを得ないのだと思っておりますけれども、やはりこれも交流ができる機会を意識的に多く創出していくということが背景にあってそういうことが起きているのだと思います。

○小田切委員 なるほど、ありがとうございました。

○鷺谷委員 ボランティアとして参加される方について伺いたいのですが、ここでの統計は5月から9月、2004年のが出ていますが、継続的に参加される方と、一時的にだけ参加される方との比率というのは大体どのぐらい、比率はわからないですか。どちらが多いというような言い方でもかまいませんけれども。

○曾根原代表理事 我々のNPOではそれは多様な連続性のあるプログラムの中で考えていますので、えいやっと分けることは意識的にしていません。というのは、例えば日帰りでもいいですし、1泊2日もいいですし、1週間もいいです。1カ月でもいいですし、半年もいいですし、そういう一応間口の広い形の対応をしまして、それに対して。

○鷺谷委員 どちらかといえば継続的に参加される方が……。

○曾根原代表理事 いや、両方ですね。非常に多様です。

○鷺谷委員 非常に多様な参加があるので……。

○曾根原代表理事 延べ人数からいっても何百人になりますから。もちろんそういう意味で言うと、全体の比率からすれば、もちろんボランティア、そちらの方が母数が多いですし、ただし、延べ人数という考え方からすると長期の方が長くなる。

○鷺谷委員 若い方中心ですけれども、それは何かネットとか、そういうのでアプローチして来る人が多いためなのか、何か口こみで広がるような人のネットワークがおありになるのか。

○曾根原代表理事 いろんな側面があると思うのですけれども、まず我々のNPO法人としての集客主体側としての情報提供の仕方も、恐らく若者が集まってくるであろうという予測のものとアプローチの仕方をしています。それはある意味ではマーケティングというのでしょうか。というのは力仕事が多いからですね。また、マザーズさんとか、そういったようなところも、ほかにもいろんな食品会社とかありますけれども、そういったところはまた違った結びつき、川上でなくて川下との結びつきでもありますので。

○鷺谷委員 ありがとうございます。

○柳沢委員長 6ページ、7ページの数字は、これは延べではなくて。顔ですね。

○曾根原代表理事 そうです。これは延べではありません。このうちに実際にボランティアシフトで入っていただいたのは3分の1です。実は9月までという、10月から募集を打ち切りました。募集して、一応登録制度にしているのですけれども、登録をして、実際に

これ以上登録してもシフトに入れなくなってしまったものですから、来ても全部断らなければいけないものですから、かわいそうなものですから、10月から一たんこのときは打ち切っています。ですから9月で。このときに延べ人数で多分全部数えてみると80何人来たのですね。ですから、この80何人も全員シフトに入れなかったものですから。また、今、募集を違った形で始めています。

○柳沢委員長 このボランティアの方は全く無償ですか。

○曾根原代表理事 無償と有償があります。例えば1日とか、日帰りとか、1泊2日みたいなパターンはよっぽどの専門能力のない限りは無償。ある一定の期間、研修期間を経た後に、ある一定の役割を担うという、こういうふうになってきた場合には、それに対する対価としての有償ボランティアというふうにしております。農工大学の学生さんたちも1週間来て、開墾専門で来て有償ボランティア。

○亘理委員長代理 2001年にNPO法人が設立されたわけですね。わずか5年の間にすごくめざましいいろんな広い範囲で活動されていると思うのですけれども、そこに至るまでのいろいろ試行錯誤みたいな、2001年の設立前のいろんな試行錯誤というのはあったというように。

○曾根原代表理事 そうですね。私は1995年に東京から山梨に移住をしまして、全くUターンでもない、私は長野県の生まれ育ちで、ある意味ではJターンという、途中下車をJターンというのですけれども、山梨県で1つ社会モデルをつくってみよう、こういうことを考えまして、こういう活動を始めて、こういうことをやるというのは1993~1994年の段階でプランニングをして、一応移っていきました。

ある意味、私のその前の仕事が経営コンサルタント、金融機関の経営指導等をしておりましたので、マネジメントということにおいてはある意味ではスペシャリストとしてありましたものですから、それを恐らくこういう分野で必要になるだろうというような自分自身で考えておったものですから、一応そのことを念頭に。やはり1998年までで、2001年、2003年と一応計画を立てて。

○亘理委員長代理 ありがとうございます。

○土屋委員 曾根原さんの活動は、活動を地域外に向けてやっつけらっしゃるのですが、地域の行政とか、例えば農協だとか、そういう地域内の既存の組織との関係というのはどういうスタンスでやっつけらっしゃるのですか。

○曾根原代表理事 スタンスはやはり協働というスタンスです。多様な協働がありまして、例えば森林組合さんと、これは数が多いものですから、協働で間伐作業だとか、食品開発における協働とか、そういったような、協働の相手というのですね。協力して働くというスタンスです。

それから地域内の住民の人たち、それぞれ役割と得意分野が違いますから、地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちはグリーンツーリズムの例えばインストラクターだとか、先生役ですね、コーディネーター役をするとつぶれちゃいますので、やはりそこはコーディネートはNPOの方がやって、先生で、農業体験だとか、ナイトハイキングするときには狩猟のおっちゃんたちにやってもらいますけれども、それはもう山のことをよく知っていますから、先生として。それぞれ役割と機能に応じて一緒に協働するというスタンスがいいと思うのです。

○柳沢委員長 この会員数70名というふうに伺っているのですが、この構成はどういう。

○曾根原代表理事 これは古いデータで、今は100人ぐらいいます。半分は正会員です。あとはその他賛助会員。

○柳沢委員長 正会員というのはマネジメントをするような方ですね。

○曾根原代表理事 そうです。半分はマネジメントをする側のいわゆる特定非営利活動促進法でいうところの社員の扱いです。正会員は。ですから、うちのNPOでいうと、実際はそこだけで事業をやっているわけではなくて、多様な連携先とやっていますので、その核となるNPOの内部のメンバーが、いろんな多様な連携先と、いろんなもろもろの事業を連携してやっているという構造なものですから、実際、事業に携わっている人数はこれよりふえます。

○柳沢委員長 あとは正会員50人で、残り50人ぐらいは。

○曾根原代表理事 いわゆる賛助会員という。

○柳沢委員長 ぽっと行ったような人も、私は賛同しますというような人もたくさんいる。

○曾根原代表理事 それはいるのです。正会員というのはすなわち主体者です。それ以外というのは協力者という位置づけになっています。

○柳沢委員長 いろんなタイプがあるということですね。

○曾根原代表理事 そうです。

○柳沢委員長 わかりました。

どうもありがとうございました。

時間が12時を過ぎてしまいました。全体を通じてもしございましたら、1、2問お出しただいてもよろしいかと思えます。

○土屋委員 非常にきょうはおもしろかったのですが、皆さん、活動の対象はかなり違うのですけれども、ある活動から入られて、だんだん活動の種類を広げていかれる。いろんな活動を担う形に広げていく。それから活動する地域もだんだん広げていくということで、全体としてみると、地域資源の全体的な管理とか、地域社会の総合的なマネジメントみたいなことにだんだん進んでいっているような感じがするのですが、こういう動きというのは、1つのトレンドなんでしょうか。それとも皆さん方が一番先発隊であって、ほかのところはあんまりついてきてないという状況なんでしょうか。こういうのは本当は我々が考えるべきことなのですから。

○下田理事・事務局長 今、私がやっているのは旬があると思っています。今が旬かな。逆に特殊なことをやってきたわけではないという自負もあるのです。当たり前のことをただひたすらこうだったらいいねというのをやってきた活動が今現在、ある意味で評価されているとするならば、今は旬だね、何年後には、もう1年もして、みんなもそういう気持ちになっていったときには、我々の活動は決して特殊なものではない。だからこそ我々の活動は次の目標を常に何かを見つけだしながら進化し続けなければいけないというのが今のうちの会の中での言葉となっています。

ですから、旬があるなと思っています。

○園田代表 よくわかりませんが、いろいろと僕らが基本的に思っているのは細々でも持続したのがいいというようなスタンスですから、あんまり一遍に盛り上がらない方がいいというふうな気もしてやってきているところもありますので、周りを見ていると、何だか、みんないろいろと盛り上がったり、盛り下がったりもしながら、それでも続けている結構仲間のグループが多いですから、そんな旬とかいわれてもよくわからないというのが正直なところですよ。

○北原理事長 地域のマネジメントというよりか、もともとやろうとしているのは、持続可能な、サステナブルな世界をつくっていかうということが1つあるのですが、そこで少子高齢化の時代の中の高齢者福祉という部分を、そういう方をどんどんこの里山という部分、自然を通して生涯現役の人間をつくっていかう、それをやることによって市町村が

村の機能とか、いろんな部分をもっともっと生き生きしていくのではないかという考え方なんです。

だからそれに向けてマネジメントというのが後からついてくるのかなという考え方です。

○曾根原代表理事 トレンドという言葉よりも私はもっと深い意味の胎動は起きているのだと思っています。というのは、やはり2つの要因だと思う。やはり日本は、いろんな政策の中で産業化政策が非常に強過ぎたきらいがあると思って、やはりコミュニティー施策がバランスが悪かったという、その結果、いろんなことが起きてしまっているところがあるので、そのバランス是正というような意味にもトレンドだろうし、また、その象徴的な言葉としてグローバリゼーションみたいなものあって、それに対するバランス是正でもって地域主義みたいなものがバランス是正の形で胎動した中で、こういう活動が今、多分変わり者が始めていて、それから一般化していくのだと思います。

○柳沢委員長 ほかにございますか。

きっとまだ聞きたいことがたくさんありそうなのですが、一応時間になりましたので、どうも4人の方、ありがとうございました。ますます御活躍いただきたいと思います。

それでは、引き続きあとの2つの議題を。

○中村土地利用調整課長 時間も押していますので、イングランドとドイツの事例を用意させていただきましたが、ご覧になっていただいて、また何かございましたら事務方にお寄せいただきたいと思います。

また、資料6ということで今後の進め方について資料をお配りしております。次回4月25日は地方公共団体の取組につきまして話を伺いたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

6月の中間とりまとめに向けてあと複数回ということになります。

以上です。

## 閉 会

○柳沢委員長 以上でよろしゅうございますか。

どうも長時間、ありがとうございました。